

平成 27 年度第 3 回「岐阜県木の国・山の国県民会議」議事概要【確定版】

日 時：平成 28 年 3 月 23 日（水）13：30～15：30

場 所：岐阜県水産会館 大会議室

議題 1

■各専門部会の取組み状況について

<森づくり部会>

（篠田部会長より資料 1 に基づき説明）

質疑なし

<木づかい部会>

（山田（貴）部会長より資料 1 に基づき説明）

【寺田委員】

以前、長野県に行った際、コンビニに間伐に関するパンフレットがあった。関心のない人がすぐに手に取れるところに森の恵みカタログなどを置いてくれるとよいと思った。また、県産材利用のためのターゲットが幼稚園、保育園の保護者ということであれば、岐阜市のメディアコスモスが人気であるが、春休みや夏休みなどに子供を見てもらう環境をつくって、遊ばせながら親もちょっと聞ける、というようにすると良いと思う。ちょっと聞いたらすぐわかる、という内容になっているとよいと思う。

【中島委員】

メディアコスモスの利用も大変良いと思う。他県の人に知ってもらうことも大変重要であるので、観光客を狙っていくことも重要であると思う。来年度の課題としたいと思う。

【山川委員】

非常に良い提言をしてくださってありがたい。今後の課題として、可能であれば、ということで提案したい。地元の小さな工務店や大工さんは非常にいい家をつくる方が多い。彼らは自分たちでHPをつくることができない。優れた家づくりをしたらその写真等を県に出すことで、〇〇工務店はこのような家をつくった、ということでHPなどへ載せることができないか。県民に対して広く、いい家をつくっている人がいるということをアピールできるようなシステムも来年度考えてもらえたらと思う。

【山田（貴）委員】

非常に素晴らしい意見をいただいた。私は、たまたま、海外で家づくりの仕事をしたが、日本の大工さんは世界的にも素晴らしい、人類の財産だという気がした。しかし、日本では過剰な競争をしており、住宅着工件数も減っている。そこで大工さん登録バンク制度のような、大工さんが財産として表に出るような仕組みをつくっていくことで、つながって木の利用になっていくような気がしている。

<普及・教育部会>

(伊藤部会長より資料1に基づき説明)

【中島委員】

木育広場の15市町、21施設は、どこで開設しているか。
→資料配布

【山川委員】

「ぎふ森の恵みのおもちゃ美術館」についてだが、本来、森林の保全や林業振興において、このような箱モノが一番合わないものだと思う。伊藤先生のやっている四美のフィールドと一体化しているものは十分許容できるが、このような箱モノは、岐阜県の歴代政権が非常に大きなものをつくって、一番大きなものでは高山で作ったが、ああいうものは後から用途がなくて、維持にも困ってしまうことがある。長くなった人は必ず箱モノをつくるので注意してほしい。規模についても、あまり華美にならないように、ということをいつも胸にしながら、そして、もし可能であるなら、県内の各市町村から木材を提供してもらって、焼印のようなもので〇〇市の木で作ったことがわかるようにしてもらえるといいと思う。全体の調和が取れないかもしれないが、そういった演出も考えてもらえるとありがたい。

(恵みの森づくり推進課長)

今回の「ぎふ森の恵みのおもちゃ美術館」の建築のコンセプトは、今までのような鉄筋コンクリートではなく、木造平屋で、かつ、岐阜県にある木を最大限使用することにある。昨日、有識者会議において稲本氏が岐阜県には日本全国を見てもない木はない、というくらいの多種多様な木がある、と発言しており、その通りだと感じている。そのために、森林文化アカデミーの建築部門、それから木育を教えている松井先生が総力を挙げて関わって、箱モノらしくない箱モノをつくっていきたいと考えている。また、なるべく様々な地域の材を使って、ここはこの地域の木だ、ということ表現できることを目標としたい。

【伊藤委員】

私が聞いている雰囲気からすると、箱がありきではなく、そのコンテンツ、そこで提供するもの、プログラムなどのソフトウェアがあって、それを入れるものを作っていくというイメージかと思う。利用の方が先に検討されており、従来のいわゆる箱モノとは若干雰囲気が違うと思っている。ご提案いただいたような、そこから各地域につながっていくことも必要であると感じるので、そういったことも反映いただけるのではないかと思います。

【寺田委員】

木育広場を地方につくるとしたら、廃校になった学校などを利用できるとよいと感じる。美濃に住んでいるが、遊びに行く場所を母親は求めている。岐阜市内は結構あるが、屋内で最先端の木のおもちゃで遊べるような場所がない。東京では海外の木のおもちゃなどで遊べる場所がある。岐阜でも海外で流行っている最先端の木のおもちゃなどで遊べるようにしてもらえるとありがたい。そして、岐阜県でも切磋琢磨して良いおもちゃを作ってもらえて、体験できるようにしてもらえるとよいと思う。

(恵みの森づくり推進課)

コンセプトとして、岐阜で作れる木のおもちゃ、ということがある。ドイツなどヨーロッパ

では木のおもちゃがたくさんあるが、岐阜県でも木のおもちゃを作っている人がたくさんいるので、なるべく岐阜県の作家さんに頑張ってもらいたいと考えている。海外のおもちゃについては今後の検討とさせてもらいたい。

【伊藤委員】

どこのおもちゃを使うかは別として、今のようなご意見は大切であると思うので、今後反映していけるようにしていければ、と思っている。

【後藤委員】

おもちゃ美術館はどこにできるのか。

(恵みの森づくり推進課長)

県図書館の近くに福祉友愛プールがあるが、今年の8月に終了するため、そこを取り壊してそのあとに作る。図書館、美術館と連携した形でのミュージアムができる。

【後藤委員】

連携とはどのようなものか。施設が近くにあるのは分かるが、ソフト的な連携はどのようなものを考えているのか。

(恵みの森づくり推進課長)

例えば、図書館で絵本の読み聞かせを行っているが、それをおもちゃ美術館の中でおもちゃで遊びながら行う、ということや、おもちゃ美術館で子供を預かって、その間に美術館でお父さん、お母さんのためのイベントを行う、ということなどができるということを考えている。

【後藤委員】

おもちゃ美術館をつくることによってそれぞれの利用効率が上がり、相乗効果が上がると考えているのか。

(恵みの森づくり推進課長)

そのように考えている。

【後藤委員】

県美術館も県図書館もよく行くが、県の美術館でもメンテナンスがやっていないところもある。草が生え放題、木も剪定されているかわからない。あの空間で一番大切なのは施設の中もそうだが、周辺である。メンテナンスもできていないのに新しい施設をつくるお金がどこにあるのか疑問。

3つの施設を選択して、おもちゃ美術館へ行って3歳の子どもを遊ばせておいて、親が県美術館でイベントに参加する、というようなことは考えにくい。

【伊藤委員】

おもちゃ美術館をつくって他の2施設の利用効率を上げよう、ということがもともとの目的では多分ないと思う。ただ、隣接している以上は3つが連携してやれることを考えていくことになるだろうし、周辺の整備ということでは、木のおもちゃを森へつなげて考えていけば、周辺の緑地をどうとらえるか、ということが検討の中に出てくると思うので、ご意見を活かせるよう、より広くご検討いただければ良いと思う。

(恵みの森づくり推進課長)
参考にしていきたい。

【中島委員】

普及・教育部会で「ぎふ森の恵みのおもちゃ美術館」が検討されているが、他の部会の人は何もわからないというのはどうかと思うが、どのように考えているか。

また、岐阜大学の先生や小学校女性校長会の先生がいてくれるので、現場の教育と岐阜の森、清流をつなげてもらえるような取組みをしてもらえるとよいと思う。そしてさらに市町の教育委員会などに訴えるなどで、施策に取り込んでもらえると思う。

【伊藤委員】

前者の話に関しては、この部会で検討している、ということではなく、まず披露してもらったということであるので、これから内容を考えていくところであるので、当然、木づかい部会からも意見をもらうこととなると思う。

後者については、現場に落とし込めるよう努力をしていきたいと考えている。

議題 2

■平成 28 年度の林政部の施策及び予算の概要について

(真野林政部次長兼全国育樹祭推進事務局長から資料 2 に基づき説明)

【山田（貴）委員】

岐阜県への移住という言葉が出たが、もう少し詳しく説明してほしい。

(県産材流通課長)

岐阜県産材を使った「岐阜の木で家づくり支援事業」を年間 200 棟行っているが、県外から県内へ移住定住される方の分を 20 棟追加で設け、岐阜の木で家づくりの棟数の拡大を行うもの。

【山田（貴）委員】

関連して、都市部から田舎に入りたい人が年金だけではちょっと不安だと、現金収入が 5 万円から 10 万円あるといいな、という線がおぼろげであるが、見えてきているという話をよく聞く。林地残材を集めて軽トラで持っていく「木の駅プロジェクト」があるが、5 万円から 10 万円を稼げるようなものもセットした移住というものを林政部として打ち出していけないか、と考えるがどうか。

(県産材流通課長)

「木の駅プロジェクト」は県内に広まっており、どちらかというと里山整備のための NPO の方が行っていることが多い。今後、そのアイデアについても検討していく。また、市町村による提案もできるのでいろんな市町村独自でいろいろなアイデアを出してもらえるとより面白いと思う。

(林政部長)

移住定住は商工労働部なども含め、県全体で進めている。ただし、現金収入が 5 万円から 1

0万円あれば来てもいい、ということは面白い話。林政部からもアイデアも出しながら、県全体で進めていきたい。

【後藤委員】

「全国育樹祭1周年記念大会」は何をやるのか。

(恵みの森づくり推進課長)

全国育樹祭の記念碑の除幕式を実施する。そこに揖斐川町の子ども達を集めて木育ひろばや森のようちえんなどのイベントを併せて開催したい。次世代の子どもを育てるための機会として取り組んでいきたい。

【森川委員】

未利用木質バイオマスの利用について、県の木材生産量についても未利用材が木材として活かせれば目標の達成に近づくことができると思う。現実にはなかなか難しく、国有林でも、全木で集材しているものの、造材した後の端材を持って行ってくれない実態がある。

瑞穂のバイオマス発電所もまだ未利用材の部分が少なく、一般材の量が多いと聞いている。各地に中小規模の施設があれば運搬コストも少なくて済む。未利用材が有効に木材として使えるような仕組みをできるだけ早く工夫してもらえるとありがたい。

里山林の整備では、1回目は不用木の除去、バッファゾーンの整備などできれいになって良いが、事業の継続性が重要であると思うが、そのあたりはどうか。

(林政部長)

本日午前中に瑞穂市のバイオマスエナジー東海から未利用材の利用が半分くらいになったという報告があった。利用価値がなかったものでも売れるようになると持ってくる、ということ。地域に拠点があれば利用が進むことになると思う。たくさん利用してもらえれば山元への還元も多くなって山に興味も持ってもらえるようになると考えているのでしっかりやっていきたい。

(恵みの森づくり推進課長)

里山林整備事業は、特にバッファゾーンでは事業後10年間地元が中心となって維持管理していく、という協定を結んで取り組んでいるが、実際それだけの労力をかけてやっていくことはなかなか難しいということが少しずつわかってきた。また、里山林整備事業では、多くが市町村が実施主体となっており、その後の維持管理も市町村が責任を負っていただいているが、現実的には管理できない、ということも少しずつわかってきた。森林環境税は、来年度で1期目が終わる。もし、2期目に更新するとしたら、事業を行った里山林の維持管理についてどのように対応していくのか、検討していきたいと考えている。

【山田（貴）委員】

木質バイオマスで需要と供給のミスマッチが未だに起きている。足りない。国有林の方もいるのでお願いしたいが、県内の需要と供給の情報交換会議のようなものを開催してほしい。一生懸命材を出してもらっているが、まだ足りない。せっかくの安い燃料を使う、という意味合いが崩れてきている。石油がこのような状況であるので、木質バイオマスの利用の流れが加速しそうなのにその辺が足を引っ張っている。県の県産材流通課か国有林主導で、需要供給の調整まではいかなくても情報交換ミーティングのようなことをお願いできれば、と考えている。

(林政部長)

需給調整までは難しい。8代将軍吉宗のように米を増産していこうとすると米の価格が下がって収入が減っていくようなことになってしまい、どうやってバランスを取っていくかというような話になってくる。

【山田（貴）委員】

もちろん必要な米がどれくらいなのかを情報交換で掴んでおいて、ガクッと値段が下がらないようにしなければならない。ただ、石油より高くなってしまうとアウトだろうと思う。

【森川委員】

国有林の間伐の現場などでは、かなり条件がそろわないとタダに近い価格であっても持って行ってくれない。結局山に戻して地拵えに手間がかかるという二度手間になってしまう現状がある。非常にもったいない。

(県産材流通課長)

道端にさえ出してもらえれば持っていける、という事業者もいる。そのような情報交換の場があれば良いと思う。全体の木材生産については需要と供給について月単位でHPでも公開していて情報交換も行っているが、バイオマス単独については行っていない。今後検討していきたい。

【山川委員】

今回は100年先というキーワードで長期的視点に立って林政を動かしていくということで、今までにないことで非常にありがたいことだと思っている。3Pの「地域森林計画の策定」で市町村森林整備計画でも長期的な視点に立った記述を指導してもらいたい。

また、4Pの少花粉スギでは成長木となった時の木材の形質が保証されているものなのかを聞きたい。

5Pでは、新規事業としてドイツのことがあるが、ドイツ林業への回帰という形が読み取れるが、ドイツと日本では森林管理の台帳やづくりが全く違う中でドイツへこれほど傾倒していったいいものかどうか聞きたい。

6Pの次世代のところでは、先日、岐阜県庁の新着HPを見ると、研修のため渡欧しました、という記事があったが、今から補正予算を通す、というものなのか、また別のものなのか。

7Pの県産材の国内・海外に向けた販路拡大とあるが、10年後の海外への販路拡大としてどれくらいの立米数を県として想定しているのか。

治山関係の11Pでは溪畔林の間伐では、昨年高山市で雪害木の大変な被害があったので、郡上市では雪害木の要望を挙げている。窓口は農林事務所なのか、市役所なのか。

(林政課長)

地域森林計画の関係はご意見として検討させていただく。

(森林整備課長)

少花粉スギは、精英樹の中で特に花粉の少ない品種を選抜しているため、成長した時の形質等については他のものと変わらない。

次世代型架線集材技術の普及については、補正予算であるが、実際に執行するのは平成28年度に入ってからで、内容的には民間の事業者の技術者の方に海外の架線集材技術を習得してもらうもの。2月に渡欧したものは平成27年度の予算で実施しているもの。

溪流沿いの森林の間伐については森林環境税を活用した環境保全整備事業と窓口は同じ。

(県産材流通課長)

県では基本計画の中で、海外販路拡大の目標数値は、平成26年度に800m³、平成33年度に1,360m³を持っていけないかということで検討しているところ。

(林政課長)

ドイツのことについては技術的に先進国であり、アカデミーなどの大学同士の交流もある。日本と異なる点もあるかとは思いますが、得るものも多く、引き続き連携していきたいと考えている。

【清水委員】

林政部の基本方針では、重要な要素が入っていると思うが、「森林を次世代につなぐひとづくり」は特に大事な視点になってくると思う。その点において、この3つの施策では全体的な施策とならない気がする。例えば、森林の個人所有者の意識、プランナーの育成、市町村の計画なども含めた、公だけでなく民の方で100年先を見据えて「人づくり」という視点での言葉が欲しいと思う。普段森林に関わることのない子供たちを対象としたものや、親子で間伐体験などをするなど、里山というイメージをつくっていくとなると、もっと民の方というか、応援団になるような施策、言葉が必要になると考える。

また、ドイツについては文化の違いや公共意識の違いについて聞いたことがある。個人所有の多い日本の山をどう活用して、どう整備していくか、ということをお頭において進めていけば良いのでは、と感じた。

【伊藤委員】

林業や森林資源という部分での人づくりについて弱いのでは、というご指摘であるが、そこは今後、計画へ書き込んでいただくよう検討してもらえればと思う。

議題3

■100年先の森林づくりのシミュレーション(案)について

(池戸林政課長から資料3に基づき説明)

【川合委員】

100年先を見越して、ということであるが、今の住宅事情を見ると寿命がかなり短いと思う。かつての日本の住宅は100年もつようにつくられていたが、今はかなりいびつな感じになっていると思う。今、円安になったら海外からの木材を買えない時代が来るのではないかと、国内で使える木をバランスよく残していくことが必要で、これを勘案していく必要がある。

(林政課技術総括監)

現在、木材の自給率は徐々に上がってきて30%近くになってきていて、建築用材に限ればもう少し高く、50%程度となっている。潜在的な競争力を持てば、国産材の需要拡大の余地はあり、一定量は使用していきたいと考えている。

(林政部長)

木材新聞の記事では、タマホームで、50%程度であったが、たぶん円安も考え、国産材の

使用率を70%に上げるとの話があった。国産材の自給率は今では30%であるが、同じ需要量でも国産材が外材に取って代わることで需要を増やしていくというのが基本計画の考え方。

【伊藤委員】

第2次大戦以降日本の林業史を見ていると経済に翻弄されてきたということがある。それを当然勘案しなければならないということはあるが、森としてどう健全にしていくかということが重要であると思うので、今後も検討を続けていただきたい。

【山田（貴）委員】

100年後はこの中の誰もいない。今、一番いいと考えたことを、夢を託して次世代に贈るということで考えないといけない。100年先はわからない。10年先でもわからない。

【山川委員】

再生林の必要量としてhaあたりの植栽本数が2,000本で植えるとしてあるが、非常に少ない本数で植えることとしているが、これからこれが標準となるのか。また、人工林を維持するための再生林で年ごとの面積の伸びが一定でないが、法正林的な考え方をすれば一定であるべきだと考えるがばらつきをあえて入れたのはどういう意図か。

（林政課技術総括監）

いっぺんに皆伐・再生林の面積が伸びる、ということはないのである程度徐々にカーブを描きながら伸ばしていくが、若干不自然な部分については見直しが必要かと思う。

植栽の本数については、従来3,000本植えというのが標準的な施業体系であったが、植栽コストの低減という面から1,500本植えなどの低植栽というのも地域森林計画上許されるようになってきた。そのような中でコンテナ苗のように肥料を加えて成長が早く、粗植でも早期にうっ閉してくるということで、技術的課題はあるが、2,000本程度に植栽本数を減らしていくことで今後考えていきたい。

【森川委員】

以前、広島にいたとき、haあたり1,000本、2,000本、3,000本で植えて60年以上たった森林を見ていたが、1,000本になると形質に問題が出るが、2,000本くらいまでであれば形質に問題はなく林業的には問題がないと思う。昔3,000本で植えたのは、当時は間伐も儲かったので、中間収入を期待していた背景があった。生態的、現在の林業的に考えれば必ずしも3,000本植えに固執する必要はないと思う。

（林政部長）

再生林については、最初から1,000haやればいいが、それは困難。そこで、助成制度などにより徐々に再生林を増加させていこうと考えている。

今、これをやらないと年齢配置を見てもらうとわかるが、50年先に伐る木がなくなってしまう。だからこそ今手を付けて将来の循環林確保を目指すことがこの計画の意義である。

【森川委員】

林業技術者について、50年後くらいまであまり変わらないが、それ以降増加している。木材生産量は安定し、生産性は増加してくるはずであるが、増加させたことに政策的意図はあるか。

(森林整備課長)

まだ検討の余地はあるかと思うが、技術者数については保育事業の事業量と木材生産の生産量のそれぞれについて、必要な人数を算出している。おっしゃるように生産性や機械化について検討してみる必要はあるかと考えている。

【伊藤委員】

このように長期的な視点で森林をとらえていくということは、林業本来の見方であったと思うが、近年できなくなってきたのではないか。このような視点に立って将来の構想を考えていくべきであると感じている。

議題 4

■第3期岐阜県森林づくり基本計画策定スケジュール(案)について

(池戸林政課長から資料4に基づき説明)

【山田(貴)委員】

パブリックコメントの期間が1か月となっているが、できるだけ長く期間を設けた方が県民の気持ち盛り上がると思うがどうか。パブコメ以外にも広く意見を聞ける場があればよいと思う。

(林政課長)

5月から6月に圏域別に意見をもらう場を設けているので、そこで様々な意見をいただけるようにしたいと思う。

その他

■岐阜県森林づくり基本条例の一部改正(案)について

(池戸林政課長から資料5に基づき説明)

【度会委員】

地球温暖化対策防止センターの方からカーボンオフセットの取組みで岐阜の森の保全のためのヒノキを使ったコースターをもらった。環境税の取組みの目的の中にも地球温暖化防止やCO₂削減もあったのでこのような取組みもいっしょに進めていったらどうかと思う。

(恵みの森づくり推進課長)

環境部局が環境税を使って行っている事業であるので、連携をしながら進めていきたい。

【山本委員】

建設業という立場で話をすると、治山事業の確保をしてもらっている。バイオマスの燃料では関係では揖斐森林資源活用センターでいろいろやっているが、ペレットになる材料の搬入が厳しくなっている状況がある。集約化など、地元に着して頑張っているが、なかなか山主さんの理解が得られないこともある。森林を活用するという意味で、もっとPRして県産材がもっと使えるような状況になるよう一生懸命考えていきたいと思うのでよろしくお願いしたい。

【山田（輝）委員】

林業に携わっている中で最も重要な問題となるのが後継者不足。どうしてもなかなか若い人を入れて家族を養えるだけの給料を林業だけで払っていかうとすると厳しいのが現状。例えば、愛知県の森林組合の人がうちに面接に来た。山が好きで林業に従事している35歳、子どもが2人目が生まれるということであるが辞めざるを得ないということであった。危惧することは、人手不足となると海外から安い労働力が入ってくるようになる。多治見市の陶器業界ではそのような動きになってきている。とはいっても、木材の価格がこれから昔のように上がってくることはないと思うので、機械を有効に使って皆伐をしていくしかないと思う。林業だけでやっていくことは難しいということで、うちの会社も四苦八苦している状況。

植栽が2,000本ということに関して、里山の活性化でモミジとサクラの山にしようとしている場所があって、そのようなところであれば高齢級の苗を植えられることで、もっと少ない本数でもきちんと管理すればいい山になるのでは、と今考えているところ。